思い出は遠くにありて

中区支部　白山　ユキ（妻）
戦没者　白山　正一
戦没地　横浜中央病院

昭和十九年、私は軍需工場で働いていた。戦争の報道は暗くなるばかりで、近いうちに空襲があるのではないかという恐ろしい噂が流れ始めた。そんなおり、職場で傷痍軍人と巡り合った。幼いころ両親と死別したという彼は寂しげな人だった。やがて空襲が始まり、不気味なサイレンが鳴ると、彼は必ず私のもとに駆け寄ってきて「自分は傷痍の身だから長く生きられない。だから、君の命は守ってあげる」と言って、怯える私を強く抱きしめてくれた。その胸の温かさ、やさしさ、私は彼と出会えたことの幸せを感じていた。

空襲は身近になってきた。誰もが明日の命すら判らなくなり、そんな絶望的な空気の中で、私たちは短い間でも幸せになりたいと話し合って、昭和十九年十二月結婚した。

その夜、東京大空襲があり、横浜にも警報が鳴り響いていた。集まってきてくれた人々と顔を合わせる間もなく、みんな外に駆け出して行った。外に出ると、街は全くの暗闇で、ふと見上げる夜空には無数の星が宝石を散りばめたように美しく輝いていた。その夜の星の美しさは今も目

©2011_財団法人神奈川県遺族会

に残っている。
昭和二十年五月、横浜に大空襲があった。その朝は静かな夜明けだった。突然の空襲警報に私と母は防空壕に駆け込んだ。壕の上の家が燃えているとかで、きな臭い匂いとともに黒煙が壕の中に流れ込み、死ぬかもしれないという恐ろしさに皆無口になっていた。
やがて解除になり外に出ると、黒煙が渦を巻き風が吹きまくっていて、まるで夜のようだった。一度の空襲で横浜は全滅となった。高台から見下ろした横浜の街は一面の焼け野原で、その恐ろしい光景とともに数えきれない人が傷つき亡くなったことを思うと、戦争というものの恐ろしさ残酷さに心の凍る思いで立ち尽くしていた。
次の日、お寺に遺体が運ばれている話を聞き、夫と伯父を探しに行った。そこで見た光景は全くの地獄絵だった。性別も判らぬほど黒こげになった遺体が重ねてあった。探す人々は涙すらなく無表情だった。その恐ろしい光景は今でも目に焼き付いている。やがて、戦争は多くの人に苦しみと辛い別れを残して終わった。
やっと平和が戻り、焼け跡に花も咲き始めた。我が家にも幸せが訪れて来た。娘が生まれ、夫の喜びは大変なものだった。楽しい日々が三年ほど続いた。しかし、案じていた夫の傷は癒えることなく、生きる喜びと幸せの思い出を残して三十三歳で戦病死となった。私は二十九歳、娘は三歳だった。覚悟していたとはいえ、別れは悲しいものだった。でも、辛いのは私だけでなく、戦争は人の一生に辛い悲しい思い出を残した。
駐留軍は戦争未亡人を優先的に雇ってくれるという話を聞いた兄嫁の計らいで、米軍基地で働

©2011_財団法人神奈川県遺族会

くことになった。身分は準公務員となり、給料が良く生活は安定した。職場の人々は若い未亡人に優しくしてくれて、働くことは苦にならなかった。私の母が娘を何不自由することもなく大切に育ててくれた。そんな母の存在は有難く、感謝の思いは限りなく今も忘れられない。

娘は成人して、浜松の人のもとに嫁いで行った。思いがけず一人暮らしとなった私は寂しさと戸惑いがあった。その時、私は五十八歳。これからの人生、自分の好きなように生きて夫の分まで楽しんで生きることに決めた。

まず、三味線を二十数年習い、名取のお免状をいただき、今それが私の宝物になっている。学ぶことの楽しさに色々なことを学んだ。そして素敵なお友達が出来て、私の老後は決して寂しいものではなかった。今、靖国神社に多くの戦死者の中の一人として、夫の軍服姿の遺影を展示していただき、多くの人に見ていただけることの喜びに私は幸せを感じている。

今、都会の空に星がなくなったけれど、多くの人々の犠牲の上に成り立つ、この平和で煌くネオンの明かりが消えることの無いことを心から願っています。

©2011_財団法人神奈川県遺族会